

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Investigating the link between temperamental and motor development: a longitudinal study of infants aged 6–42 months

和文タイトル:

気質と運動の発達との関連に関する月齢 6 か月から 42 か月までの縦断研究

ユニットセンター(UC)等名: 愛知ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: BMC Pediatrics

年: 2024

DOI: 10.1186/s12887-024-05038-w

筆頭著者名: 中川敦子

所属 UC 名: 愛知ユニットセンター

目的:

運動発達は、1920 年代以降、運動技能の獲得に焦点が当てられてきたが、1980 年代には、ダイナミックシステムアプローチが導入され、動機づけが重視され始めた。しかし、乳幼児期の運動発達における個人差を検討した研究はほとんどない。本研究では、生後 6 か月から 3 歳までを対象に、気質と運動発達との関連についての縦断研究を行なった。

方法:

2011 年 1 月から 2014 年 3 月の間に募集を行い、2,639 名の母親に生後 6 か月時点で質問票を送付し、1,657 名から子どもの月齢 6 か月、24 か月、42 か月時点の回答を得た。各月齢における微細運動と粗大運動に関する質問項目は小児神経科医が作成した。月齢 42 か月時点で発達性協調運動障害(DCD)質問票による調査を実施した。気質は乳児、幼児、小児の行動調査票(短縮版)を用いて親が評価した。集められたデータを相関分析および構造方程式モデリングによって解析した。

結果:

月齢 6 か月では、高潮性(活動性が高く、新しい刺激に積極的に近づく傾向)と注意定位能力が運動機能と正の相関関係にあった(それぞれ $r = .57$; $r = .40$, $ps < .001$)。気質の自己制御性(エフォートフル・コントロール)は、幼児期に運動機能を促進し、月齢 42 か月時点の DCD 質問票では、運動中の制御、全般的協調性、微細運動に正の効果をもたらした(それぞれ $\beta = .14$; $\beta = .30$; $\beta = .37$, $ps < .001$)。高潮性は運動中の制御と全般的協調性に正の影響を及ぼしたが(それぞれ $\beta = .18$; $\beta = .06$, $ps < .001$)、負の情動は全般的協調性、微細運動に負の影響を及ぼした(それぞれ $\beta = -.08$; $\beta = -.08$, $ps < .001$)。

考察(研究の限界を含める):

エフォートフル・コントロールは運動発達にプラスの、高潮性は粗大運動系にはプラス、微細運動系にはマイナスの影響を、また、負の情動は協調運動にマイナスの影響を及ぼすと考えられた。本研究の限界として、運動機能の発達を調査するために独自作成の質問項目を用いた点がある。専門知識を持たない養育者でも評価できるよう、可能な限り図解を交え選択肢を示したが、一部の項目については判断が難しかった可能性があり、今後さらなる改良が必要である。また、気質は、短縮版の質問票を用い、かつ、養育者によって評価されたことから、測定の精度や評定者バイアスの影響について考慮する必要がある。さらに、本研究では 3 回の追跡調査票のうち 1 回でも 1 年以内に返送されなかった人を脱落とした。維持群と脱落群の属性等にはほとんど差がなかったが、脱落群の乳児では、高潮性、負の情動がやや高かった可能性がある。

結論:

高潮性は早期運動発達における重要な気質の反応的次元であり、エフォートフル・コントロールと運動は、相互作用しながら発達する可能性が示唆された。